柳田国男研究資料集成

後藤総一郎編

■既刊　第Ⅰ期全10巻別巻Ⅰ・第Ⅱ期全10巻別巻Ⅰ

＊日本図書センター

日本民俗学を樹立した柳田国男に関する研究論文・評論・随想・座談会・著作解題・書評・新刊紹介などのすべてを網羅した他にその例を見ない画期的な資料集成遂になる。従来比較的等閑視されてきた詩人時代の柳田国男評から、農政学・民俗学および文学・歴史・民族・教育・国語問題その他について、あるいは柳田国男の人となりを語る諸篇七〇〇余（第Ⅰ期）、第Ⅱ期三五〇篇の集大成によって、柳田国男の評価・受容・批判の変遷をたどることが極めて容易となった。

柳田国男研究資料集成への期待

網野　善彦
（神奈川大学短期大学部教授）

民俗学については全くの素人である私のようなものでも、若いころから現在にいたるまで、柳田国男の仕事から教えられたことは多大なものがある。ただ、不勉強な私は恣意的に自らの関心に関わる柳田の著作を読みかじっているだけで、柳田の生涯とその研究の軌跡を自分の目で辿ったことはない。その意味で、最適な編者後藤総一郎氏の手によって、柳田に関する諸研究を集成しようとするこの企画は、こうした柳田研究の素人にとっての、よき導きの糸となってくれるであろう。柳田がなぜ「常民」という言葉を自らの学問のキー・ワードとして用いたか等々、年来のいくつかの疑問を解決してくれる緒口がここから得られるものと、私はこの集成に大きな期待を持っている。

▼『利根川図志』

発光体の正体を究めるために

井上ひさし
（作家）

柳田国男は巨大な、しかしふしぎな発行体です。古くさいようでいて、おそろしくモダンなところがあります。超国家主義者かと思うと、無政府主義者のようなことを云ったりもします。たいへんおもしろいテーマをひどくつまらなく書いたかと思えば、じつにむずかしい主題でわくわくするほどおもしろい大論文を仕上げたりします。全集を通読するたびに、その巨きさに圧倒されて感動するものの、柳田国男という一個の存在そのものについては謎が濃くなってきます。こんなときに、柳田国男の存在を日本人がどう受けとめたのか、それが知りたいな、と思います。柳田国男が放つ多様光線を、だれが、どこで、どう受けとめたか、それらを綜合することで、ふしぎな発光体の正体を究めたくなるのです。そしていま、「柳田国男研究資料集成」の発刊によって、そのことが可能になりました。

日本の学問史・精神史

色川　大吉
（東京経済大学教授）

柳田国男は八十八歳まで活躍してこの世を去られた。この資料集成はその柳田に関して論評し研究した文章を、明治三十年から七十年間にわたってまとめられたものだという。

柳田国男が日本近代の生んだ最大の学問的巨人であることは今さらいうまでもない。この人の樹立した学問は日本民俗学・民話学・国語学・女性学等々、多岐にわたりながら一つの体系を成している。従って柳田を論ずることは、そのまま日本近代の人文科学を論ずることになるし、また、論者自体の学問や思想の一里塚を示すものともなる。『研究資料集成』というのは珍らしい企画だが、これによって柳田国男の学問と思想の全容が明らかにされたらすばらしいことである。そればかりではない、柳田という鏡に写し出された日本の学問史・精神史が輪廓をあらわすことになると信ずる。編者はこの方面で多くの業績をもつ第一人者である。画期的な企画の成功を祈り、大きな成果を期待したい。

伝説から研究へ

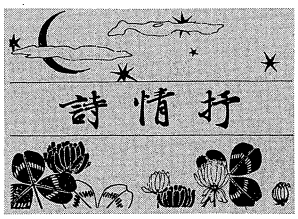
神島　二郎
（立正大学教授）

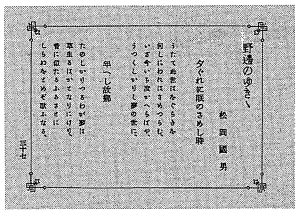
戦後四〇年のあいだ、くりかえし人びとの注目をあつめ、論議された人として柳田国男とその学問に及ぶものはないであろう。そしてその著作は、筑摩書房刊行の『定本柳田国男集』三十一巻別巻五巻（うち一巻は索引）におよぶが、分類語彙十二冊や若き日の詩文をはじめ、農政関係その他、定本に入れられなかったものが少なくないことを思うと、残念ながら全集がないといってよい。したがって、基本になる資料が整備されないまま論議がくり返されているのである。そして柳田の人と学問にかんする論議はぼう大な量に達し、今では、いうにその類型や系統が論じられてもよいほどになっており、したがって、ある種の伝説化現象が起っていたから、それを一度集大成しておくことが必要になっていたのである。そしてそれは柳田伝説の研究という新しい分野を切り拓くのに役立つと同時に、柳田伝説と切りはなして柳田研究を進めることを強要することにもなるであろう。

社会教育の発展のために

北田　耕也
（明治大学教授）

柳田国男をくぐり抜けなければ、日本の社会教育の研究も実践も前へ進めない。そう考えてきた。しかし、柳田は高い山だ。




▼『抒情詩』（明30.10）

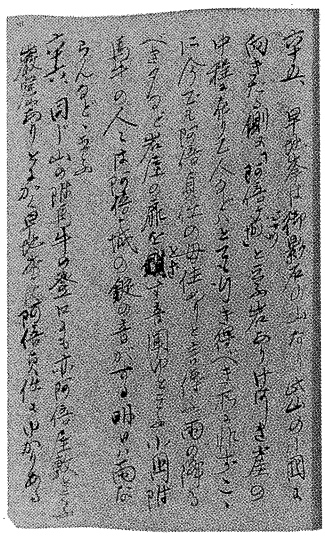
今度、第一人者の手で、これまでの研究資料が集大成されることになった。ありがたい話だ。何か力が湧いてくるようだ。

我々の拠って来る根を探るために

国分　直一
（梅光女学院大学教授）

本居宣長の『玉勝間』をひもどくものは、彼が古い習俗について、その背景にある思想をとらえようとして、民間の伝承に注目していることを知るであろう。その点において本居は柳田国男の先学であった。しかし柳田は民間の伝承の採集において徹底していた。その学問の方法はヨーロッパの人類諸科学におけるフォークロアの方法を導入して、わが民俗学の体系を殆ど一人で確立したのであった。柳田が日本民俗学の父といわれる所以である。我々は我々の拠って来る根を探ろうとする欲求をもっている。それは歴史的研究における学問的欲求にも通じるものである。

我々はそのような場合にも、柳田が切り開いてくれた学問的成果の中に先ず立ち入って見るのである。我々は柳田の学問と思想をうかがいうる、どのような資料をも尊重する。この度の日本図書センターによる柳田国男研究資料集成の刊行は近来の快事、筆者は胸踊らせて待望している。


▼『遠野物語』（筆書き初稿本）

『柳田国男研究資料集成』への期待

庄司　和晃
（大東文化大学教授）

柳田さん去って二十四年。今では春秋苑の丘から私どもを見つめているわけだ。「少しは世の中が安らかになるような仕事をやったかね」と。その御本人を云々した諸文章が満載されて世に出ると言う。時代の節目である。

柳田国男の光芒の輪

谷川　健一
（日本地名研究所所長）

私は柳田国男を生涯の師として仰ぎつづけてきた。もし柳田国男に出会うことがなかったら、私は精神的に餓死していたであろう。柳田の太陽のごとく慈愛にみちた思想に照らされて、私は誤ることのない道を歩み、そして今日にいたっている。

もしも柳田国男が存在しなかったら、日本の近代思想史、いな日本思想史全体がなんと見すぼらしくなったことだろう。まさしく柳田は日本の思想の太陽を創ったのである。

今日、柳田の思想は民俗学のせまい枠を脱して、多くの学問分野にはかり知れぬ影響を与えはじめている。それは将来さらに大きな光芒の輪を拡げていくことはまちがいない。

今回、柳田に関する研究、評論などの一切の集成が、私の長年の友人、後藤総一郎氏によって企てられた。それは文字通り空前にして絶後の壮挙である。後藤氏並びにそれを出版される日本図書センターの労苦に深い敬意を表し、一冊でも多く売れることを望む。

愚者の夢想を撃つ

坪井　洋文
（国立歴史民俗博物館教授）

柳田国男の学問、思想、人間について、あらかた論じつくされたと考えるのは、のんきな愚者の夢想である。本集成の第Ⅰ期で示されたように、柳田山脈の裾野は実に未開の文化的曠野であったのだ。

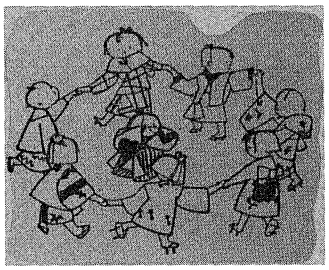
第一に、柳田学を超えずに、柳田の供養塔を建てることの空虚さが解ってきた。第二に、日本民俗学史の構築はこの集成の完結をまっておこなう必要がはっきりしてきた。第三に、柳田学は決して現在に生きる者の占有物ではなく、過去の人、これから生まれてくる人を対象に形成されていたことを思い知らされるのである。第四に、柳田は日本的特殊としての文化や歴史を枠組としたのではなく、その普遍性こそが究極に求められていたことが解ってきた。第五には、現代の民俗研究者の学際的協業への無気力性、国際的視野の欠落性をあばきだしつつある。

第Ⅱ期の本集成は、以上のような課題に対して、さらに自己解剖をせまるであろう。

一つの文化現象

鶴見　和子
（上智大学教授）

柳田国男について書かれたすべての文章を、一八九七（明三〇）年から一九六七（昭四二）年まで、全十巻に収録刊行するということの壮挙は、柳田国男が、すでに一つの特異な文化現象となったことを示している、とすれば、この仕事は、柳田個人の研究に寄与するばかりでなく、近代日本の文化・思潮を調べるうえで、すぐれて役立つ原資料となるであろう。そのいみでこの網羅的資料集成が、内外の日本研究者の座右の書となることを希ってやまない。



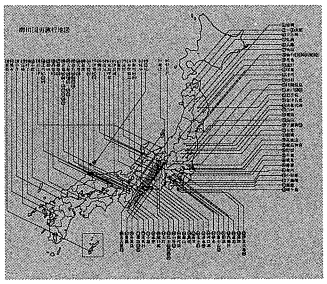
▼『こども風土記』挿絵（初山滋）

偏狭な発想からの脱出

前田　愛
（立教大学教授）

日本近代文学の批評や研究は、これまで柳田学を敬遠する傾向があった。民俗学の方法は古典文学には有効であっても、近代文学にとっては迂遠な回路であるかのように見なされてきたし、何よりも自我の発展を基軸とする文学史観は、柳田国男が開拓した常民の歴史とは馴染みにくいところがあった。しかし、最近になってこうした偏狭な発想はしだいに修正されようとしている。たとえば、泉鏡花の文学世界は、土俗的な領域に深く根を下していることが明らかになってきた。「龍潭譚」や「化鳥」に描かれた少年たちは神かくしの記憶（トラウマ）をとどめているし、「草迷宮」の幻想的な物語には子産み石の伝承が重要なモチーフをなしている。現代の文学でも、古井由吉の「聖」は、柳田国男の「毛坊主考」をヌキにしては、解読することが難しい。

このような流れのなかで、柳田の学問と思想を知るために欠かせない研究資料を集成する企画が、第二期を迎えたことをよろこばしく思う。



▼「柳田国男旅行地図」
（部分：別巻１より）

推薦したい本

牧田　茂
（白梅学園短大教授）

柳田国男の研究が、地道に、しかし根強い拡がりをみせている今日、こうした集大成の出現は大いに歓迎されるだろう。殊に誠実で真摯な、後藤さんのような方を編者に得たことがうれしい。もちろん推薦したい本である。

掘りひろげつづけたい柳田学

益田　勝実
（法政大学教授）

柳田国男がきりひらいた広大な新しい学問領域に対して、柳田翁自身、実に長い間△△学と学の名を付して呼ぶことを回避されていた。われわれの学問はまだ若い、と言いつづけられていた。人間の行動には三つの様式がある。個々人が創り出す一回的行動。便宜のため自分で反覆して行なう習慣的行動。それら個人の営みとちがい、社会的存在としての個々人が、群れとしての人間として、共同で創出し、維持、活用している慣習。この最後の慣習が、実は人間の行動の最大部分を占めているのに、人間はそれを自覚しなかった。

不断に変容しつつ受けつがれる慣習・習俗を相手どる、新しい学問の正体を見定めかねて、翁がためらいつつ民俗学を樹立されたことの大きな意味のすべてを、わたくしはまだつかみえていない。柳田翁の大いなる志をうけつぎ、新しい発展を期することが、民俗学者と呼ばれる人たちの範囲を越えて、広くわたくしたちに課されているように痛感している。

つきせぬ泉をもとめて

宮田　登
（筑波大学教授）

柳田国男の思想と文学は、尽きせぬ泉のように、次々と新鮮な活力をわれわれに与えてくれる。少年時代から八十八歳に至る境涯において、柳田はつねに知的好奇心を働らかせており、折々の発想とその展開について怠けることなく、活字に表現した。その膨大な業績については、従来多数の研究文献があり、分析の視点も、細分化された一つの学問の枠内におさまらず、多様なアプローチがなされている。

そのためややもすれば、一人よがりにおち入りやすい傾向もある。柳田国男研究が学際的に行われ、日本研究の要となる位置づけがますます必要になった現在、望まれるのは、柳田国男研究資料の客観的な集大成であろう。今回、もっとも適切な編者を得て、そうした機会が到来したことは、人文諸科学に属し、真に日本の庶民の立場に立った日本研究を志ざそうとする人々にとって願ってもないことである。この企画の成功を心より祈りたい。

宿命的な課題

山口　昌男
（東京外国語大学教授）

近代日本の知識人と呼ばれる人々の中で、柳田国男ほど、幅広い領域において足跡を残した人は稀である。特に、近頃、日本人論・日本学に対する関心が高まれば高まるほど、柳田国男の研究は、日本国内のみならず、国外においても急速な進展を見せている。

このような時に、柳田国男の開拓した日本学（国学）をどのように読むかという今日的な関心に基づいて編集された、柳田と同時代人の対話とも云うべきこの柳田国男研究資料集成が第一期の刊行を無事了えて第二期に入るというのは誠に慶ばしい次第である。

日本精神史の中に柳田国男をどう位置づけるべきであるかという課題は、柳田と同時代を生きた研究者・思想家・文人が後世に遺すべきものとして課せられた宿命的な課題とも云うべきものである。後藤総一郎氏を中心に編まれたこの集成は、国の内外においてそうした課題解答の礎石ともいうべき快挙として長く讃えられるに違いない。

■第Ⅰ期（明治30年5月～昭和42年12月）

第1巻（明治30年5月～昭和20年3月）

無署名（2点）・は、な・奥生・繁野天来・抒情詩編輯者・国木田哲夫（独歩）・鯉洋生・小林暁波・小村武治・島崎藤村・岡田良一郎・幸田露伴・小田内通敏・田山花袋・泉鏡花・水野葉舟・佐々木繁・喜田貞吉・日夏耿之介・移川子之蔵・徳富蘇峰・小野武夫・喜舎場永珣・関口健一郎・新居格・西村真次・坪井九馬三・岡正雄・金田一京助・南江二郎・松村武雄・有賀喜左衛門・矢野宗幹・井東憲・松本信広・A・B・C・D・肥後和男・島津久基・小宮豊隆・橘正一・栗山一夫・斎藤昌三・井上通泰・西村真次・中村康隆・鈴木棠三・折口信夫＝釋迢空・守随一・岡正男・松村武雄・大間知篤三・今泉忠義・古川辰夫・大藤時彦・大西伍一・市川信次・橋浦泰雄・倉田一郎・浅野晃・桑原武夫・赤松啓介・宮本常一・宮本勢助・小川徹・喜多野清一・牧田茂・岡崎義恵・佐藤信衛・板垣直子・中谷宇吉郎・斎藤茂吉・伊藤信吉・稲田済・周作人・後藤興善・関敬吾・林達夫・淡水魚・大矢真一・水木直箭・辻村太郎・角川源義・千勝重次・橋谷田大・久松潜一・和歌森太郎・池田弘子・高浜年尾

第2巻（昭和21年3月～昭和26年12月）

河井酔茗・古川哲夫・倉田一郎・和辻哲郎・岡崎義恵・吉野裕・近藤忠義・中村光夫・原田敏明・東畑精一・和歌森太郎・折口信夫・新村出・コバヤシ・ヒデオ・志村義雄・土岐善麿・石田英一郎・大藤時彦・直江広治・菊地雨々・小寺廉吉・志賀義雄・まつしまえいいち・関敬吾・服部静夫・川島武宣・平山敏治郎・山口麻太郎・古島敏雄・肥後和男・沢田四郎作・金城朝永・堀一郎・千葉徳爾・牧田茂・亀井勝一郎・家永三郎・辻村太郎・『毎日グラフ』編集部・串田孫一・古谷綱武

第3巻（昭和27年2月～昭和33年8月）

牧田茂・馬淵東一・柴田実・T・O・千葉徳爾・小倉倉一・丸山久子・戸塚文子・井之口章次・江馬三枝子・早川孝太郎・有賀喜左衛門・花田清輝・臼井吉見・加藤百

■第Ⅱ期（昭和43年2月～昭和50年8月）

第11巻（昭和43年2月～昭和44年12月）

見田宗介・山本健吉・大藤時彦・中野重治・比嘉春潮・岩淵悦太郎・中西悟堂・大越進・木下順二・堀田善衛・平岡敏夫・益田勝実・中村哲・山折哲雄・柳田為正・福田アジオ・戸井田道三・川村二郎・中根千枝・上野勇・谷沢永一・一志茂樹・田中宣一・野口武徳・牛島巌・平山和彦・宮田登・牧田茂・関敬吾・谷川健一・大岡昇平・大江健三郎・中島河太郎・伝田功・鶴見和子・千葉徳爾・伊藤幹治・綱沢満昭、住谷一彦

第12巻（昭和45年2月～昭和47年9月）

大藤時彦・谷川健一・富木友治・柴田武・三島由紀夫・門倉弘・紙谷威広・後藤総一郎・中島河太郎・東畑精一・中村哲・津村喬・鶴見和子・大村真康・鎌田久子・牧田茂・無署名・伊藤幹治・飯塚敬三・阿部真司・川村二

究資料集成

谷子・家永三郎・井伏鱒二・鎌田久子・豊川昇・高木健夫・川村善二郎・藤沢衛彦・高藤武馬・亀田純一郎・正宗白鳥・なかのしげはる・大藤時彦・中川善之助・西岡虎之助・荒垣秀雄・石田英一郎・い・B・3・林大・斎藤弘山・杉森久英・山本健吉・桜井徳太郎・無署名・関敬吾・柳田国男・徳川無声・神島二郎・梅津忠夫・鶴見俊輔・和歌森太郎・今井誉次郎・清水崑・SUN・伊東多三郎・山崎斌・橋川文三・秋山修道・桜田勝徳・古谷綱武

第4巻（昭和33年12月～昭和35年10月）

岡正雄・関敬吾・山本健吉・大竹新助・大藤時彦・千葉徳爾・益田勝実・花田清輝・無署名（2点）・鶴見俊輔・亀井勝一郎・笹淵友一・祖父江昭二・広末保・西郷信綱・丸山久子・石原綏子・東畑精一・池田弥三郎・和歌森太郎・相馬庸郎

第5巻（昭和36年1月～昭和37年8月）

寺田透・益田勝実・相馬庸郎・広末保・東畑精一・神島二郎・杉浦明平・中島河太郎・橋浦泰雄・宮本常一・柳田泉・なかのしげはる・中野重治・開高健・鈴木満男・和歌森太郎・谷川健一・関敬吾・松島栄一・宇野脩平・無署名・新村出・嘉治隆一・山本健吉・石母田正・鶴見和子・長谷川如是閑・松本信広・橋浦泰雄・中村光夫・中村汀女・石田英一郎・橋川文三・中島河太郎・臼井吉見・池田弥三郎・児玉幸多・市河三喜・沢田四郎作・戸板康二・F・H・メーヤ・井伏鱒二・山口麻太郎・保田与重郎・森銑三・西角井正慶・桜田勝徳・小堀杏奴・小井川潤次郎・谷川徹三・関敬吾・きだみのる・瀬川清子・盛永俊太郎・志賀義雄・黒田郁男・中村哲・渡辺紳一郎・山下澄子・町田嘉章・荒正人・長岡博男・杉森久英・岩倉規夫・川口朗・荒垣秀雄・古野清人・柴田実・佐多稲子・伊馬春部・藤沢衛彦・京極純一・吉本隆明・鎌田久子・東条操・辻村太郎・中河与一・箱山貴太郎・鈴木棠三・小林武治

第6巻（昭和37年9月～昭和37年12月）

橋川文三・藤田省三・池田勉・稲村徹元・丸山久子・白石凡・池田弥三郎・戸川安章・岸哲男・和歌森太郎・牧

郎・宮田登・芳賀登・神島二郎・桜井徳太郎・林房雄・有賀喜左衛門

第13巻（昭和47年10月～昭和48年2月）

谷川健一・後藤総一郎・藤枝元・花井純一郎・田中基・神島二郎・五来重・宮田登・鈴木満男・石田郁夫・町田佳声・山口昌男・松永伍一・宮本常一・川村二郎・高橋英夫・堀一郎・柳川啓一・黒田喜夫・中村啓・堀三千・和歌森太郎・吉村貞司・芳賀綏・家坂和之・相馬庸郎・岩崎敏夫・松本健一・橋川文三・色川大吉・伊藤幹治

第14巻（昭和48年2月～昭和48年7月）

芳賀登・綱沢満昭・ロナルド・モース・崔仁鶴・岡正雄・谷川健一・伊藤幹治・後藤総一郎・来嶋靖夫・桜井徳太郎・福富正実・高橋英夫・奈良本辰也・中井信彦・磯田光一・桶谷秀昭・入江隆則・直江広治・竹田旦・佐藤信行・橋浦泰雄・宮田登・笠原伸夫・橋川文三・米山俊直

第15巻（昭和48年7月～昭和48年12月）

鶴見和子・鈴木満男・芳賀登・有賀喜左衛門・戴国輝・宮本馨太郎・谷川健一・平山和彦・比嘉春潮・村井紀・後藤総一郎・宮田登・綱沢満昭・宮田登・山本健吉・鎌田久子・岡野他家夫・森直太郎・中村素堂・小村政一・福富正実・五十嵐誠毅・伊藤幹治・池田弥三郎・岡野弘彦・川村二郎

第16巻（昭和48年補遺～昭和40年4月）

岡茂雄・池田弥三郎・柄谷行人・神谷慶治・谷川健一・川本彰・後藤総一郎・山下紘一郎・奈良宏志・池上隆祐・笠井清・菊池照雄・福田アジオ・三輪公忠・岩崎敏夫

=各期全10巻別巻1

柳田国男研

田茂・浅見淵・松本信広・関敬吾・柳田為正・志賀義雄・最上孝敬・瀬川清子・山口昌男・谷川健一・東条操・林大・岩淵悦太郎・桑原武夫・新村出・嘉治隆一・大藤時彦・Miyata Shimpachirō・阿閉吉男・桜田勝徳・野間吉夫・西脇順三郎・那須皓・松本芳夫・高野正巳・佐古純一郎・金田一京助・倉沢米吉・伝田功・上野勇・福地幸造・竹村民郎・渡辺庸一郎・平山敏治郎・神島二郎・伊原宇三郎・喜多野清一・富本一枝・花田清輝・岩崎敏夫・谷沢永一・野田宇太郎・池田勉・田中新次郎・桂又三郎・土井卓治・桂井和雄・橋詰延寿・小林一郎・楳垣実・森口奈良吉・田岡香逸・酒井忠雄・保仙純剛・奥村隆彦・鈴木太良・沢田四郎作

第7巻（昭和37年12月～昭和38年12月）

加藤三郎・桜田勝徳・高谷重夫・平山敏治郎・逸木盛照・西谷勝也・笹谷良造・橋本鉄男・中野荘次・水木直箭・太田幸子・小寺廉吉・鈴木東一・倉田正邦・岸田定雄・鷲尾三郎・竹田聽洲・大田栄太郎・上司海雲・橋文策・五来重・横井照秀・山口最子・小谷方明・宮本常一・横田健一・田村吉永・柴田実・山田隆夫・雑賀貞次郎・河本正義・後藤捷一・坪田譲治・平山敏治郎・渋川驍・野口義恵・大藤時彦・加藤守雄・清崎敏郎・鎌田久子・橋浦泰雄・土岐善麿・金田一春彦・住谷一彦・有賀喜左衛門・矢島祐利・山口弥一郎・岡見正雄・安永寿延・巌谷大四・長谷川四郎・藤原与一・牧田茂・若杉慧・桜井徳太郎・神島二郎・中村直勝・岩淵悦太郎・本田安次・牛尾三千夫・千葉徳爾・池上隆祐・石塚尊俊・磯貝勇・大森義憲・亀田純一郎・岡正雄・嘉治隆一・森正史・津村秀夫・原田敏明・丸山学・堀一郎・武田明・神島二郎・山川菊栄・矢成政明・田中秀央・上野勇・最上孝敬・矢田部勁吉・大月松二・桂井和雄・野田宇太郎・石原媛子・高崎正秀・小林英夫・金関丈夫・今井善一郎・高藤武馬・今野円輔・比嘉春潮・西谷勝也・宮良当壮・吉本隆明・池田勉・和歌森太郎・中村哲・奈良環之助・斎藤清衛・飯島衛・島袋盛敏・飯島小平・村治夫・白井浩司・能田多代子・入谷仙介・小山清・鈴木栄太郎・川西実三・壺井栄・中西三郎・柴田勝

第8巻（昭和39年1月～昭和39年12月）

後藤総一郎・益田勝実・森田多里・堀三千子・吉田幸四・宮田登・野口武徳・山田野理夫・益田勝実・川村二郎・飯倉照平・宮田登

第17巻（昭和49年4月～昭和49年10月）

松田徹・福田アジオ・小川直之・色川大吉・芳賀登・関敬吾・村武精一・伊藤幹治・中井信彦・後藤総一郎・桜井徳太郎・谷川健一・宮田登・向山勝貞・和田正洲・倉石忠彦・北見俊夫・藤井正雄・小島瓔礼・松本広信・柴田実・綱島満昭・鶴見和子・柳川啓一・野口武徳・植松明石・酒井卯作・岡本恵昭

第18巻（昭和49年10月～昭和50年4月）

桜井徳太郎・野沢虎雄・岡田陽一・福田アジオ・後藤総一郎・柄谷行人・大島広志・大田謙二・大塚小夜子・瀬川拓男・添田シゲ子・守谷信二・渡辺節子・有賀喜左衛門・山本健吉・無署名（2点）・鎌田久子・磯田光一・森崎和江・藤井隆至・中村哲・鶴見和子・山本健吉・谷川健一・色川大吉・柴田実・酒井忠雄・佐久間惇一・野村純一・牛島盛光・住谷一彦・竹田聽洲・山口麻太郎・松平斉光・佐々木正興・芳賀登・山下欣一・庄司和晃・竹内利美・土井卓治・柳田為正・野口武徳・岡谷公二・粟津則雄・神島二郎・橋川文三・多田道太郎・入沢康夫

第19巻（昭和50年4月～昭和50年7月）

田中克彦・小田晋・宮田登・玉城哲・原広司・吉田敦彦・上笙一郎・小島美子・今村与志雄・小沢俊夫・野口武徳・無署名（4点）・岡見正雄・神島二郎・和歌森太郎・

＊既刊 第Ⅰ期・第Ⅱ期

郎・中里重吉・桂孝二・清水幾太郎・橋川文三・古川哲史・松岡磐木・菊池喜栄治・岡野弘彦・森荘已池・浅見淵・早川昇・今野円助・深水正策・宇田零雨・木越二郎・丸山久子・市原豊太・浜田秀男・森山泰太郎・森直太郎・中井信彦・服部知治・矢倉年・和歌森太郎・臼井吉見・佐々学・太田宇之助・野沢虎雄・坂口一雄・安間清・田中新次郎・神島二郎・野田宇太郎・石田英一郎・福永武彦・山本嘉次郎・山下久男・蔵田周忠・鎌田久子・嘉治隆一・鈴木さえ子・宮崎修二朗・阪口保・服部知治・田村吉永・W・A・グロータース・胡桃沢友男・及川大溪・谷川徹三・飯塚浩二・金田一京助・石田幹之助・殿木圭一・熊谷幸博・富木友治・生田清・いいだ・もも・大藤時彦

第9巻（昭和40年1月〜昭和41年3月）

後藤総一郎・土岐善麿・住谷一彦・益田勝実・大藤時彦・太田千津・相馬庸郎・水田信利・篠宮はる子・鈴木満男・石田英一郎・生松敬三・山本健吉・萩原竜夫・牧田茂・谷川健一・柳川啓一・柴田実・家坂和之・中島河太郎・関敬吾・江守五夫・平山敏治郎・松前健・大藤時彦・福富正実

第10巻（昭和41年1月〜昭和42年12月）

岩崎敏夫・角川源義・芳賀登・宮田登・比嘉春潮・安永寿延・竹田聴洲・橋川文三・大藤時彦・山本健吉・島尾敏雄・門倉弘・笠井清・中村哲・嘉治隆一・平山和彦・河上一雄・村武精一・中野重治・益田勝実

別　巻Ⅰ

柳田国男研究史(1)柳田学の形成（後藤総一郎）
『遠野物語』評価史（後藤総一郎）
〔参考資料〕
柳田国男研究文献書誌Ⅰ
柳田国男旅行地図
『柳田国男研究資料集成』第Ⅰ期総目次
『柳田国男研究資料集成』第Ⅰ期執筆者索引

小木新造・永池健二・小田富英・杉本仁・山下紘一郎・黒羽清隆・竹内利美・大月松二・安間清・清沢芳郎・箱山貴太郎・谷川健一・後藤総一郎・阿部謹也・五来重・藤井隆至・相馬庸郎・益田勝実

第20巻（昭和50年7月〜昭和50年8月）

鶴見和子・村井紀・庄司和晃・小田富英・綱沢満昭・山下紘一郎・杉本仁・後藤総一郎・佐々木重治郎・阿部正路・饗庭孝男・池永健二・野口武徳・拓植信行・松本健一・木村龍生・Ronald Morse・Tsurumi Kazuko・大久保正・有賀喜左衛門・谷川健一・安丸良夫・飯倉照平・住谷一彦・橋川文三・柴田武・伊藤幹治・無署名（4点）・小松和彦・山本健吉・松本信広・神島二郎・桜田勝徳・中井信彦・伊藤清司

別　巻Ⅱ

柳田国男研究史(2)「詩歌」への照射（後藤総一郎）
〔参考資料〕
柳田国男研究文献書誌Ⅱ
柳田国男主宰・参加「研究会」一覧
柳田国男編集発行等雑誌叢書(1)「郷土研究」総目次
『柳田国男研究資料集成』第Ⅱ期総目次
『柳田国男研究資料集成』第Ⅱ期執筆者索引

＊写真説明

▼表紙：「雪祭り」の里新野（長野県阿南町・柳田は大正15年8月訪ねている）への入口「南宮峡」（右岸、同町御供）。

▼右上：「子がえし」の絵馬(部分)。この絵馬を見た幼い柳田は、心の奥深く「怖れ」というものをやきつけられた。

▼左上：「椰子の実」。旅の途次、伊良湖岬に漂着した椰子の実を嘱目した柳田は、後年『海上の道』を著し、柳田からの伝聞により藤村は「名も知らぬ遠き島より／流れ寄る椰子の実一つ……」と詩に結実させ（『落梅集』）、大中寅二の作曲により今なお愛唱されている。

「門内の小僧」の立場から

柳田　為正
（お茶の水女子大学名誉教授）

世に「門前の小僧」ということばがあるが、いわゆる「柳田学」の場合、不肖などはさしずめ「門内の鼻垂れ小僧」ということになろうか。このたびの日本図書センター大奮発による御企画――明治三十年以降というと、何しろ父は同三十三年学卒の身ゆえ、話はかくいう小生の出生以前にまで遡ることになるが、その十年余のちからずっと第二次大戦後まで、思えば長い門内小僧の立ち場を続けてきたもの、しかもこの小生がわが生涯の専門の道を生物学に選んだことにも、実は父からの影響や誘導のかかわる所が大きいのである。

父はある意味でまれに見る明けっぴろげな日常の生活態度をとり続けてきた父親そして人間だったと思う。仕事のことでも、たまたま目下構想中の問題でも、頑是ないわが子にまでいとも気軽に語りかけてきた。その例をいま数え上げていたらきりがないが、そうした話題も、子供らの成育とともに段々高級になってきていた。全体として「説教」よりも「相談」や「質問」の形をとるのが、特徴的な傾向だった。

世間の評者間には父の書くものに文学的側面から関心をもたれる向きが多かったようだが、本人自身の積もりでは、多分に人性の客観的・合理的探究を目ざしていたかに覚えてならない。第一その文体なども、一見持ってまわった晦渋な行文のように見えて、その実本人の念頭には、ヨーロッパ語文脈の道標が貫いていたかのようだ。だからかれの書き物の欧語訳は、やってみれば存外（ある意味で）楽な作業となる可能性もあったはずと思う。

かれの探究対象は、何といっても、まず過去の歴史にかかわる問題だった。一方、事がらの性質上、終始微妙な仮説設定の連続だった。小生はときどき、父の所論に関して、それはいったい時代的にいついつ頃の話ですかとたずねることがあった。「大体足利時代前後以降のことか」という返事の返ってくる場合が、多かったように覚える。しろうとの不肖が簡単にいうのはまことに不遜きわまることではあるが、一度横軸に時間をとったいわば「年表」の形で、それぞれの出来事や変遷を体系化・心像化しておいて欲しかったという気もする。いちいちの実証、検証は、その上でやればよいわけである。

以上御安心だてからとはいえ、つい〳〵軽口ばかり叩いたが、このたびの出版企画を拝見するのに、これはどうしてそんな生やさしい批判作業ではなく、編著者後藤さんの御学識と精力とをもって始めてよくさばき得る重作業であることが拝察される。完成時の壮観をしのび、広く江湖の御協力を切望してやまぬものである。

＊編集方針

一、柳田国男に関する研究論文・評論・随想・対談・鼎談・座談会・解説・解題・書評・新刊紹介などを収録する。
二、資料の収録は、第Ⅰ期・明治三〇年（一八九七）より昭和四二年まで、第Ⅱ期・昭和四三年～昭和五〇年八月までとした。
三、資料の配列は発表年代順とし、新聞・雑誌などに分載されたものは、初回につづけて第二回以降を収め、それぞれ書誌的事項を明記した。
四、底本は、原則として初出・初刊本により、重版・再録本によった場合は、底本のほかに初出の書誌的事項を附記した。
五、翻刻は、原表記通りとし、かなづかい・送りがな・句読点・記号・符号などの統一や改変は行なわない。ただし、①漢字は原則として常用漢字体とした。②ルビは、特定の訓みのものに限って底本のルビを生かし他は省略した。圏点・傍線などは底本通りとした。

後藤総一郎編
柳田国男研究資料集成
A5判・上製函入・各巻平均420頁・別巻140頁
第Ⅰ期／全10巻別巻1
定価各巻五、九七四円（本体五、八〇〇円）
別巻五、一五〇円（本体五、〇〇〇円）
揃定価六四、八九〇円（本体六三、〇〇〇円）
第Ⅱ期／全10巻別巻1
各巻五、九七四円（本体五、八〇〇円）
別巻四、一二〇円（本体四、〇〇〇円）
揃定価六三、八六〇円（本体六二、〇〇〇円）

宮澤賢治研究資料集成
続橋達雄編
第Ⅰ期＊全10巻別巻1（既刊）
A5判・上製函入・各巻平均440頁・別巻86頁
定価各巻5,974円（本体5,800円）・別巻4,120円（本体4,000円）
セット定価63,860円（本体62,000円）

株式会社 日本図書センター
〒112 東京都文京区大塚3―4―13
電話03-947-9387 振替東京2-8206

■特約店